

田川 大吉郎（たがわ だいきちろう）

昌子住江
(関東学院大学専任講師)

明治2年(1869)10月長崎県に生まれる。16年中学に入学するも、すぐ新設の長崎外国语学校に転校(支那語専攻)。同校が廃校になると、21年に上京して東京専門学校(現早稲田大学)邦語政治学科入学。多少の曲折を経るも明治23年7月卒業。在学中にキリスト教を讃る。



卒業後郵便報知新聞入社、25年都新聞に主筆として迎えられるなどジャーナリストとして活躍。この間に東京市政や都市問題への関心が湧く。明治36年8月尾崎行雄東京市長の要請で東京市水道部長となるも、市会との軋轢で翌年3月退職。このころから安部磯雄、木下尚江らの社会主義者と、都市や市政について語る場を持つ。39年の東京市電運賃値上げ反対運動では、運動の一方の旗頭となり、後に電車市有を熱心に主張するようになる。

明治41年5月衆議院議員に当選、以後9回(補欠1回を含む)議席を得る。同年9月第二次尾崎市政の助役となり、大正3年10月までの約7年間その職にあった。当時の東京は市区改正事業の速成期であり、土木関係を統

轄する第3部の助役となった田川は、都市施設整備に邁進する。下水道計画の具体化、瓦斯報償契約等に功績。都市経営のセンスを持ち技術にも精通していた。この時期については、尽力した東京築港が成らなかつたこと、重視した公園が市区改正の過程で縮小されたことを心残りとしている。後に市政会館が日比谷公園に計画された時、東京市会にあってこれに反対したのも公園重視から。

大正11年より明治学院で社会改良史を、また東京商科大学講師として市政論を講ず。大正14年明治学院総理。関東大震災後の復興に際しては、衆議院議員として復興予算削減に反対の論陣を張るとともに、『作らるべき東京』『東京市の復興計画とバーナムの桑港市改造計画』等を公にして批判や提言を行なう。市民の利益を説く田川は、自治の観点から東京市を復興の主体とすること、市民生活を根拠を成す施設としての、築港、小住宅建築助成、道路・公園等の整備に尽くすことなどを主張した。

ジャーナリスト、政治家、宗教家と田川の活動は幅広いが、都市には生涯関心を持ち、欧米の市政についても明るかった。著書に『都市政策汎論』等。他に新聞・雑誌の記事・論考多数。雄弁家であり啓蒙的な講演も多かった。昭和22年(1947)最初の東京都知事選に瘦駆を駆って革新系より立つも惜敗。同年10月死去。享年78才。